

2015年12月22日掲載

「豊かな感性を育む」

3歳の息子がこの間、「疲れた」と言って驚いた。どこでそんな言葉を覚えたのか考えたところ、その言葉をいっているのは自分だった。仕事に追われて自然に口から出ている言葉を子どもはしっかりと聞いていたのだ。一緒にいる時間が長い親の言葉や感性を子どもはそばで吸収しているので、親のあり方はとても大切だと実感した。

私は今、自らの力で生き方を選択するために必要な能力や態度を身につけるキャリア教育に携わる仕事をしており、道内の高校や大学で創造力や発想力を高められるようなプログラムを提供している。その中には「感性が豊かになってほしい」という思いがある。近年、表情が乏しく反応がない生徒や学生が増えている気がする。そのため、せっかくの良さを就職面接で活かしきれていないこともある。

この間、本棚を整理していたら、「色の名前」という本があった。写真と一緒にさまざまな色が掲載されていた。私たちが一言「赤」という色の中には、紅色、茜色、緋色、ばら色など実にたくさんの種類がある。また、虹が七色なのは日本だけで、アフリカでは三色、ドイツは五色だという。日本人は古くから豊かな感性を持っているのだ。

その感性を育むために、イベントに参加するなどたくさんの体験や経験をしてほしい。得たことを感じ、言葉にすることで楽しさや悔しさなどの感情が生まれてくる。私もこれからさまざまな体験をし、子どもや生徒、学生たちと一緒に感情を味わいたいと思う。

(毎日新聞)